男女共同参画推進せんだいフォーラム 2024

先達に聞く 2024

長く活動してきた女性たちが語る、「次世代に伝えたい思い」

2024 年 11 月 15 日（金）
エル・パーク仙台　市民活動スペース

公益財団法人せんだい男女共同参画財団

「先達に聞く」は、仙台で長年活動してきた女性たちに「次世代に伝えたい思い」をお話しいただく企画です。2016 年に「エル・パーク仙台 30 周年企画」として初めて実施し、今回で 8 回目になります。

それぞれの団体の活動については、催し物やさまざまな媒体を通して知ることができますが、一人ひとりの女性たちがどのような思いで、何をめざして活動を続けてこられたのか、その思いに触れる機会は多くありません。男性主導の社会が、女性たちの声に耳を傾けてこなかったという現実もあります。

エル・パーク仙台は「市民活動をする場がほしい」という女性たちの声を受けて、全国に先駆けて開館した男女共同参画センターです。女性たちの経験や思いを継承するために、次世代へのメッセージを伝えていただく場をつくり、今回を含め 39 名もの先達にお話しいただきました。平和、子育て、環境、労働、まちづくり――。あらゆる分野での女性たちの草の根の活動が、今の仙台につながっていることを実感しています。

この記録を通して、一人ひとりの思いを受け取っていただければ幸いです。

※記録は、ご本人の発言をもとにまとめたものです。
※仙台市男女共同参画推進センターのホームページで、
この冊子の PDF ファイルをダウンロードできます。
URL　https://www.sendai-l.jp/

目　次

「女性たちのチカラ」　澁谷　由美子
大学女性協会仙台支部 副支部長　P.1

「子どもたちが安心できる居場所」　藤村　優子
仙台市学童保育連絡協議会　P.2

「人から人へつながる」　熊谷　豊子
仙台市沿岸 編み会・縫い会 代表　P.3

「子どもたちの未来のために」　早坂　美恵子
青葉区母親大会連絡会 事務局長、新日本婦人の会　P.4

受けとめ、つなぐ思い　～話し手へのメッセージ　P.5

「女性たちのチカラ」

澁谷　由美子（しぶや・ゆみこ）さん
大学女性協会仙台支部 副支部長

大学女性協会仙台支部に入会したのは、1990 年代の終わりの頃。
知り合い数人に誘われて入会。当初は何をする会かまったく知らないまま、なんとなく会費を払っているだけの幽霊会員。
2003 年頃に突然、「支部長に」との話が舞い込む。皆さん年長者ばかり、日ごろ大変お世話になっている方たちとあって断り切れず、引き受ける。4 年間の任期を終えた後、副支部長に。
2015 年から２度目の支部長を経て、現在は再び副支部長を務める。
協会の大きな目的の一つに、女子大生への奨学金授与がある。

大学女性協会の歴史

大学女性協会は 1946 年に設立された全国的な協会です。設立当時に「男女共同参画」という言葉はなかったと思いますが、「女性の高等教育の向上」「男女共同参画の推進」「国際協力と平和」の３つを目標として作られました。当初は「大学婦人協会」という名前でしたが、「婦人」という言葉が時代にふさわしくないという問題提起があり、7~8 年の議論の末、「大学女性協会」となり今にいたっています。

寄贈された資金をもとに基金を設立し、毎年選考で選ばれた若手研究者や障害を持つ方に奨学金や補助金を付与しています。東北からも選出されるようになり、私たちとしても大変嬉しく思っております。また、仙台支部として毎年フィリピンの女の子に、ごくわずかですが資金を援助しております。

やったことがないからやる

私が支部長になったのは今から 20 数年前です。誘われて入ったものの何のための会かもわからず毎年会費だけ納めているだけの会員でした。ある日、当時の支部長から呼ばれ、突然「次期支部長はあなたに決まったからよろしく」と言われました。私の職業は音楽で、長年それだけをやってきましたので「私なんかにできません。やったことがありませんし、畑違いです」と言ったら「やったことないからやるんでしょ！同じことをやっても面白くないじゃない！新しいことをやりなさいよ！」と。何も言い返せませんでした。そこから支部長を引き受けることになったのですが、それまで事務的なことをあまりしたことがなく、文章を打つところから始まりました。何度打っても OK が出ず、5~6 時間パソコンの前に詰めていることもしょっちゅうありました。「やったことないからやりなさい」と言われてしまうと逃げ場がない。けれど、結果的にやって良かったと思っています。

震災後の全国大会を仙台で

支部長の任期が終わるころの 2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が発災しました。東京本部を中心に全国の方々が応援してくださり、被災地支援金を募って 100 万円の基金を贈ってくれました。被災地の高校生を３年間支援することも決まりました。

任期が終わり副支部長として活動する中で「全国大会を仙台でやろう」と提案しました。私の想いとしては、応援してくださった方々に仙台が頑張って復興している姿をお見せしたかったのです。最初は強く反対されましたが、「私が支部長をやるのでやりましょう」と声をかけたところ皆さんしぶしぶ引き受けてくれました。無事に 2015 年、エル・パーク仙台で全国大会を開催しました。バス 2 台をチャーターし、全国からいらした方々を荒浜小学校と名取の被災地に連れて行きました。「テレビを見るのと実際に見るのは全然違う。本当に来て良かった」と言ってくださり、やって良かったと思いました。「ここでいっぱいお金を落としていってください」と言ったら、皆さん喜んで買い物もたくさんしてくださいました。あの時の全国の方たちの温かさは今でも忘れません。

80 代は働き盛り

一番辛い時に何かをやるというのは、組織の絆を強固にしてくれるものだと思います。

この協会の一番びっくりすることの一つは、年齢層がとても高いこと。入会した当初、「ここでは 80 代は働き盛りよ」と言われました。皆さん本当にお年寄りに見えない。勉強してパワーポイントを使って、パソコンは達者。とてもびっくりしました。女性のチカラはすごい。皆さん、いろんな意味で頑張っていきましょう。

「子どもたちが安心できる居場所」

藤村　優子さん（ふじむら・ゆうこ）さん
仙台市学童保育連絡協議会

1971 年 8 月　夫の転勤に伴い仙台市へ転居
1979 年 9 月　4 月に開校した仙台市立芦口小学校の留守家庭学級の指導委員に
1980 年　　仙台市学童保育連絡協議会　発足
2002 年 5 月　仙台市太白区より「まちづくり活動賞」受賞
　　受賞理由：子ども達の放課後の居場所づくり、子どもの非行化防止
2007 年 12 月 鹿野地区地域担当民生委員児童委員
2022 年 7 月　小学校で読み聞かせボランティア活動、同 11 月 民生委員児童委員退任

「むくどりの夢の家」開設

1979 年、芦口小学校の留守家庭学級（現在の学童保育）「むくどりの夢の家」（以下：「むくどり」）の指導員になりました。当時は学童保育という名前は今のように知られておらず、「鍵っ子教室」が広く世間に通用していた時代です。

芦口小学校が新設校だったこともあり、「むくどり」は何もかも一からの出発でした。有志の母親たちが放課後の居場所を必要とする子どもたちの存在を調べ、学校にかけ合いました。校長先生自身が共働きで子どもの放課後を心配していたためか、「学童保育をつくりたい」という私たちの思いに理解を示してくれました。開校してから半年後の開設は、当時としては異例のスピードでした。

指導員は大事な仕事

「むくどり」を開設するまでの間は、場所探し、入級児童の募集対応、指導員探しという膨大な難問が次々と押し寄せてきました。小さな繋がりを頼りにやっと見つけた場所は、築 40 年にもなる古い土壁の借家でした。市から開設準備金として 30 万円程の支援がありましたが、備品を揃えるためには使えても家賃には使えず、一時的に親たちが経費を立て替えました。指導員の人件費、水道代、電気代以外は全て親が出していたため、各家庭の負担は大きかったと思います。

指導員 2 人のうち 1 人は決まっていましたが、あと 1 人が決まらず、急遽校長先生の推薦で私がピンチヒッターを引き受けることになりました。人生の大先輩に相談したところ、「これからの日本は、国際競争下で男性だけの給与を上げていく社会ではなくなる。結婚した女性も働くようになる。だから学童保育の指導員は大事な仕事だ」と背中を押されました。自分には実力がないと思いましたが、そんなに大事な仕事ならやっていこうと決めました。

より良い学童保育に向けて

翌年、仙台市学童保育連絡協議会（以下：連協）が発足したのですが、その活動は目覚ましいものでした。親の要望を市へ届け、さまざまな制度が変わっていきました。“いきいきとした放課後”をスローガンとして一挙に学童保育運動が盛り上がり、一小学校区に一つの学童保育は当たり前の考え方になりました。それと同時に、国の施策で児童館を作り、子どもたちの居場所づくりが提案されるようにもなりました。保育所の充実とともに働く親のスタイルも大きく変わり、パートで働く女性やフルタイムで働く女性も増えました。しかし、1 か月もある夏休みの中でたった 10 日分の指導員の手当しか出ませんでした。その後、連協は、長期休業日を全日公費で運営できるよう訴える運動に切り替わっていきました。

親や地域と連携しながら

「むくどり」では一日でも多く開設するための資金づくりとして、廃品回収を始めたり、市民まつりに出店したりしました。長期の学校休業日だけでなく、カレンダーの赤い日以外は全て開設するようにし、3 月 31 日で保育所が終わる新入級児童も 4 月 1 日から受け入れました。学校や市は反対だったかもしれませんが、子どもの安全安心には代えられないという強い気持ちがありました。

子どもたちとはスケートや川遊び、太鼓、陶芸教室などさまざまな遊びをしました。春休みは徒歩でベニーランドへ行き、夏休みは週 1 回子どもたちと当番制で昼食やおやつをつくり、校庭では指導員も一緒にドッジボールやサッカーをしました。本当に目いっぱい遊び、自分たちがやりたいことをやってきました。今の学童保育も、さまざまな組織と連携しながら、知恵と工夫を出し合ってやっていってほしいと思っています。

「人から人へつながる」

熊谷　豊子（くまがい・とよこ）さん
仙台市沿岸 編み会・縫い会 代表

岩手県生まれ。
2011 年 3 月に小学校教員を退職。4 月、宮城野体育館のボランティアセンターに行き、岡田小学校避難所の支援物資の仕分けや、民間のボランティアセンター「津波復興支援センター」の受付を担う。また、全国から送っていただいた毛系や布を仮設住宅などで手芸をする方に届け、作品を「みやぎの・まつり」などのイベントで販売したり、各地のボランティアの方たちに紹介したりする活動をしてきた。

震災後のボランティアで

2011 年 3 月末、小学校教員を少し早めに退職しました。趣味を見つけてのんびりした日々を過ごすつもりだったのですが、震災が起き、じっとしていられない、何かしたいと思って宮城野体育館のボランティアセンターに行きました。そこで野村陽子さんという方と出会い、岡田小学校避難所の支援物資（主に衣類）の仕分けのボランティアに通い始めました。洗濯機もなく、まだ多くの方が体育館の床で生活していた時期です。支援でいただいた新しい下着を人数分、地区ごとに分けて、要望に合わせて一人ひとりにお届けする活動を続けました。

6 月に皆さんが仮設住宅に移られてから、野村さんのお友達が送ってくれた毛糸を持って集会所に行くと、お母さんたちが「昔は息子の靴下も手編みをしていた」と、とても喜んでくれました。SNS で全国に呼びかけて集まった毛糸や布・編み棒などの手芸用品を、みなし仮設住宅にお届けするようになりました。

お茶っこと手編み物

岡田地区の方が多く暮らす 3 つの仮設住宅集会所では、木曜日と金曜日に定期的にお茶飲みの時間が持たれていました。私は、衣類の仕分けボランティア仲間とともに毛糸などを届け、一緒にお茶をいただいたりしていました。毛糸でできた作品は、ボランティアに来た学生たちが「学園祭で売りたい」と注文してくれたり、東京都東久留米市の復興支援コンサートに招かれて販売したり、仙台の植木市、2015 年国連防災世界会議の会場となったエル・パーク仙台でも販売するなど、たくさんの人々に手に取ってもらう機会をいただきました。

作り手の皆さんは、手を動かすことで、いやなことを考えなくて済みます。また、作品が売れることや人に喜んでもらえることが励みになり、作り手同士が集まって毛糸や糸を選ぶ・作品を見せ合う・作り方を教え合う、といったことが楽しみの時間になったようです。

つながりから次の活動へ

リーダーの野村さんが赤ちゃんを授かり、私が会の代表を引き受けることになりました。野村さんが、子育て中に出会った大坂裕子さんという方を紹介してくれました。生後 8 か月のお子さんを抱えて石巻で被災した彼女は、「被災した女性に仕事を」と赤ちゃんのお食事エプロンをつくる「園児エプロンプロジェクト」や、赤ちゃんと一緒に親子で集えるシェアサロン、「おやこフェス」などを立ち上げました。当初、私はこの「おやこフェス」で手仕事品を販売させてもらっていたのですが、今では運営側のボランティアスタッフとして手伝っています。

大坂さんのつながりで、不登校カフェ「ふふふるーむ」の武山理恵さんとも知り合いました。「ふふふるーむ」が介護で通っていた母の自宅に近かったこともあり、時間の都合がつくときに手伝うことになりました。少しだけですが、子どもたちのお昼の食器の片付け、公園に出かけるときの見守りなどをしています。

若い世代にも仕事以外の時間を

いろいろな活動をしてきましたが、意思や決意を持ってやってきたわけではなく、その時々、周りの方とのかかわりで続けてきました。付き合ってくれた仲間や、かかわってくれた方に感謝しています。笑顔や感謝の言葉で、私自身が救われたような気持ちです。

フルタイムで働いていた時は、エル・パーク仙台の存在は知っていても、どんなことをしているかはほとんど知りませんでした。こんなにいろんな方と出会える場所なのに、今思えば残念です。小学校は昔以上になんだか大変そうで、先生方に「お休みの土日にちょっとエル・パークに来てみて！」とは、なかなか言い出せませんが、若い方たちが、仕事以外で視野を広げたりつながったりする時間がもっと持てたらいいなと、ちょっと後悔とともに思っています。

「子どもたちの未来のために」

早坂　美恵子（はやさか・みえこ）さん
青葉区母親大会連絡会 事務局長、新日本婦人の会

1967 年～2006 年　保育園（保育所）勤務
1970 年　　保育士資格取得
　　・南京玉すだれを覚え、仕事や仲間との慰問活動にいかす
　　・本原遠州流（華道）師範資格取得
　　忙しい親子へ一時の安らぎをと勤務地玄関に生花を飾る
2000 年　　園長に昇格
2008 年～　宮城県母親大会連絡会（会計）として活動
2010 年～　青葉区母親大会連絡会事務局長、新日本婦人の会青葉支部常任委員として活動

保育士として

私は小さい時から「大きくなったら保母さんになりたい」という夢をずっと持っていました。保母さんになるには学校に行って資格を取らなければなりませんが、私立の短大に入れてもらえる余裕などありませんでした。県立の保育専門学校が 1 か所だけあり受験したのですが、残念ながら落ちてしまいました。落ち込んでいる私に保母助手を探していると声をかけてくださった方がいて、18 歳で民間の保育所に飛び込みました。

念願の子どもたちとの触れ合いは、とても嬉しく毎日が楽しみで、39 年間保育一筋で過ごしてきました。資格のない者が働くことでの悔しさを幾度となく味わい、勉強の連続だったように思います。18 歳の小娘が、お父さんお母さんという大の大人を相手に話さなければならず何度戸惑ったか…相手もそうだったと思います。保育中心だけではうまくいかない現実や、子どもと家族の関係に抱いた疑問、話し合いを重ねても解決しない問題に、悶々としたこともたくさんありました。

活動を通して広がった世界

保育の中しか知らなかった私にいろいろな世界があることを教えてくれたのが、今の活動です。私が所属する新日本婦人の会は「核戦争の危険から女性と子どもの生命を守ること／憲法改悪に反対し、軍国主義復活を阻止すること／生活の向上、女性の権利、子どもの幸せのために力を合わせること／日本の独立と民主主義、女性の解放を勝ち取ること／世界の女性と手をつなぎ、永遠の平和を打ち立てること」を目的にかかげています。一つひとつがもっともで、共感することでした。子どもたちを守る活動をしていくことは、私に合っている、やらなければいけないとの思いで活動しています。

働いている時は子どもを「育てる」ことが第一でしたが、これからは環境をどう良くしていくか、そのためには何が一番大切なのかを考え、いろんな人の声を聞きながら、声を出していきたいと思っています。

今は、学校給食費を無償化にする署名活動をしています。「自分の口に入るものは自分で払うのが当たり前」と言う方もいます。しかし、毎日どうやって食べていくかを考えなければならない家庭もあるのです。そんな家庭のためにも、給食は無償化にすべきです。ほかにも、親子のリズム教室を開催したり、原爆展などを開催して戦争の悲惨さを訴えています。

母親大会の原点

1954 年、アメリカのビキニ環礁で水爆実験が行われ、マグロ漁船第五福竜丸が被曝、無線長の久保山愛吉さんが亡くなりました。このビキニ事件から始まった原水爆禁止の運動が母親運動の原点で、「核戦争から子どもを守ろう」と活動が急速に広がりました。

1955 年 6 月に東京で開かれた第 1 回日本母親大会では、久保山さんの妻すずさんが「子どもへの真の愛は戦争をなくすこと、核兵器を作らせないこと」と訴え、大会に参加した母親たちは子どもの生命を守り抜くことを誓い合ったそうです。当時の「核戦争から子どもを守ろう」という母親の願いと「子どもたちを再び戦場に送らない」という教師の願いを軸に、教育・暮らし・平和の問題を話し合い、励まし合って行動して現在に引き継がれています。今年は被団協の方がノーベル平和賞を受賞されました。本当に遅かったという思いとともに、大喜びしています。やっと一歩前進した、そんな気持ちです。

人との出会いは宝物

このような活動を通して、いろいろなものの考え方・捉え方があることを教えられました。自分の考えの足りなさ、視野の狭さに落ち込むこともありましたが、今の自分があるのは、これまでの活動の中での人との出会いのおかげです。人との出会いは宝物だと思っています。これからもその宝物を大事に育てながら、周りの方々から頂いたものを、今度は私が周りの人たちに伝えていけたらと思っています。

受けとめ、つなぐ思い ～話し手へのメッセージ

[澁谷　由美子さんへ]

・「やったことないからやる！」何かにチャレンジする時、この言葉を思い出したいです。
・澁谷さんの熱意とまわりのみなさんの思いがつながりあって進んできたことがよく分かりました。
・行動力のすごさに圧倒されました。
・80 代の方々が頑張っているお話を聞いてパワフルだと思いました。自分もそういう 80 代になりたいです。
・復興していく仙台を見せようと全国大会を成功させた渋谷さんに、リーダーとしての強い思いを感じました。

[熊谷　豊子さんへ]

・熊谷さんの活動が、多くの女性の心に安心感や連帯感を与えたのだと思います。素晴らしいです。
・“その時できることを、仲間と”というメッセージ、つい一人で頑張りたくなってしまう私に必要な言葉だと思いました。
・手を動かすこと、動かしながら互いに話すこと、とても気持ちが和む大切なことを伝えていただきました。
・ご自身の力や経験を活かして無理なく活動されながら、自分の世界を広げて楽しまれているのが素敵だなと思いました。私もそんなふうになりたいです。

[藤村　優子さんへ]

・今当たり前に利用している学童保育。開設のご苦労を知り、感謝の気持ちでいっぱいです。
・一人ひとりの思いや工夫、行動が積み重なって子どもを守る環境ができたのですね。
・藤村さんに助けられたたくさんの働くお母さんたちの笑顔が見えるスピーチでした。
・今の児童館が少しでも子どもたちの居場所になるように頑張っていきたいと思います。
・藤村さんのネットワークの広げ方、市への要望の仕方など、学ばせていただきました。

[早坂　美恵子さんへ]

・いろいろなものの考え方がありますが、「声を出して周りに伝える」のは大事な行動だと思います。
・今世界のいろんなところで戦争があり、いつも心がざわざわします。平和は自分たちでつくっていかなくてはいけないですね。
・「やらなければならない！」という思いを持ち続けていらっしゃることが素敵です。
・私自身まだ母親ではありませんし、これからなれるのかもわかりませんが、全ての女性や子どもが安心して暮らせる世界を望みます。

男女共同参画推進せんだいフォーラム 2024
「先達に聞く 2024」

2025 年 2 月発行
公益財団法人せんだい男女共同参画財団

仙台市男女共同参画推進センター
エル・パーク仙台
〒980-8555
仙台市青葉区一番町 4-11-1
141 ビル（仙台三越定禅寺通り館）5・6 階
TEL. 022-268-8300
FAX. 022-268-8304